

神々に育てられしもの、最強となる

羽田遼亮



ファンタジア文庫

2893

神々に 育てられしもの、 最強となる

A boy raised by
gods will be
the strongest.

Hisosuke Hata
羽田遼亮
ill fame



CONTENTS

- 004 ____ 第一章 神々の子
- 036 ____ 第二章 一四歳になった少年
- 126 ____ 第三章 剣の勇者
- 167 ____ 第四章 アナハイム商会の娘
- 233 ____ 第五章 聖剣のあま森
- 289 ____ 第六章 巨人襲撃——そして
- 317 ____ あとがき

口絵・本文イラスト
f a m e

第一章 神々の子

十

僕には四人の父親と母親がいる。

彼らは捨て子だった僕を拾い、育ててくれた恩人だ。

十数年前、まだ赤子だった僕は神々が住むという山に捨てられた。

理由は分からない。

その年は飢饉だったらしいし、近隣で戦争が頻発していた。

飢饉によって子供に食料を回せなくなったのか、戦争によって困窮を極めたのか、あるいは双方だったのかもしれないが、赤子だった僕は捨てられ、それを拾ったのが神々だった。

僕を見つけたのは万能の神レウスである。

彼は農民の姿に化け、麓の街を視察してきた帰りに僕を見つけたらしい。

ほろ酔い気分で川岸を歩いていると、川上からどんぶらこと流れてきた僕を見つめる。小舟に乗せられていた僕は小さく泣いていたそうだ。

あまりにも僕の泣き声が自然だったので、あやうくそのまま見送ってしまいそうだった、とはのちのレウスの言葉だった。

ただ、僕はそのまま川下に流され、滝壺に落ちることはなかった。

レウスが救ってくれたからだ。

レウスは大鷲に変化すると、僕を鷲掴みにし、大空に羽ばたいた。

そのまま神々が住まう山、テーブル・マウンテンに行くと、僕を仲間に見せた。

剣神のローニンは僕の顔を覗き込みながら言う。

「なんでい、人間の赤子か。俺はてっきり酒の肴かと思った」

無精ひげを撫でながら嘆く。手には酒瓶が握られている。

治癒の女神ミリアは言う。

「まったく、男はこれだから。見てみなさい、この可愛い赤ちゃん、まるでマシユマロのよう」

ミリアは僕を抱きかかえ、あやしなげに微笑む。

それを詰まらなそうに見つめるのは魔術の神ヴァンダルだった。彼はしわがれた声をもらす。

「……子供は好かん。五月蠅いし、我が儘だ」

僕の顔を一瞥すると、魔術書に視線を戻す。

三者三様の態度であるが、万能の神であるレウスは知っていた。彼らが赤子である僕を気に入ったことを。

事実、レウスがこの赤子を育てることを宣言すると、彼らは難色を示したものの、反対はしなかった。

それどころか、なにかと理由を付けては赤子である僕のもとにやってくるようになった。

剣神ローニンは日課である素振り一万回をこなすと、僕のもとにやってきてこうささやいた。

「小っちゃい手だな。まあ、いい、もう少し大きくなったら、剣を握らせ、俺の弟子にしてやる。すぐに剣圧で蠟燭を消せるようにしてやる」

治癒の女神ミリアは大地との語らいを終えると、僕のもとにやってきて僕を抱く。

「なんと可愛らしい赤ちゃんでしょう。ああ、母性本能がうずくわ」

彼女はそう言うのと胸をポロンと出し、乳を与えようとするが、妊娠したことがない女神は乳を出せない。

諦めると胸をしまつて代わりに僕の頬にキスをする。

「この子は世界一優しい子、いつか最高の治癒師にしましょう」

ミリアが僕をゆりかごに戻すと、魔術の神ヴァンダルがやってくる。

白髪の老人は詰まらなそうな顔をする。しかめ面で僕を見つめると、一転、表情を崩し、間拔けな顔をする。

その顔を見てきゃつきゃと笑う僕。

老人の眉が下がる。

「……存外、ユーモアの分かる赤子だ」

老人はそうつぶやくと、決心する。

「よからう。この坊主をわしの弟子にしてくれようか」

ヴァンダルは僕を見つめるとつぶやく。

「この子はやがて最強の魔術師となる。我が後継者となろう」

こうして三人の神々に気に入られた僕。

僕を拾ってくれた万能の神を含めると四人か。

彼らが僕の父親となり、母親となり、師匠となる。

「我が儘で自分勝手な人たちがだが、彼らは厳しくも優しい師父、師母となる。そして彼らが僕に名前もくれるのだが、なにかにつけて喧嘩になる四人が珍しく命名に關しては一致した。」

争うことなく、一回の話し合いで僕の名前を決めてくれたのだ。

こうして僕は命拾いをし、名前を得た。

神々が僕に与えてくれたのは、

「ウイル」

という名前だった。

しかし、自分がウイルという名であると知覚できるようになるまではもう少し時間が掛かる。

なにせ僕はまだ生まれたばかりの赤子なのだ。

特技と言えば泣くことと寝返りを打つことくらい。

他にできることはなにもなかった。

十

僕がウイルという名前を知覚できるようになった頃、神々は諍いを始める。

教育方針に違いが始めたのだ。

拾い親である万能の神、あらゆるものに化身し、誰も本当の姿を知らない無貌の神レウスは牡鹿の姿でこう言った。

「ウイルは優しい子供だ。自由奔放に育てたい。この山でなにもものにも縛られることなく、天衣無縫に育てたい」

その教育方針には残りの神々も賛成したが、まずは劍神であるローニンが言う。

彼は劍を司る劍術の神で、東洋のサムライのような格好をしている。腰にぶら下げている曲刀は東洋のサムライブレイドだった。

ローニンは刀を掲げながら言う。

「自由奔放に育てるのはいいが、男には腕っ節が必要だ。特に劍術がな。この子には劍術を習わせ、最高の劍士にしたい」

と、手作りの木刀を僕に握らせる。幼い僕は喜びながら木刀を振るう。

それを見ていたミリアが木刀を取り上げ、僕を抱きしめる。

「なにを野蛮なことを言っているの。この子は山の動物たちに囲まれ、彼らの傷を癒やす治療師になるの。獣のヒーラーとして穏やかに人生を過ごさせるのよ。剣術なんて野蛮よ」

「なんだと！」

「なによ！」

ローニンはミリアを睨み付けるが、彼女には暖簾に腕押しだった。彼女は治療の女神であるが、その実力は剣神に比肩するのである。

それにミリアは女性ながらも気が強いのだ。

治療の女神、別名、豊穰の女神は、今はこの山で隠遁生活をしているが、神代の時代は邪神に対抗するため、先頭に立って、数々の邪悪を打ち払ってきたのだ。剣神とて恐れることはなかった。

そんなふたりのやりとりを見つめるのはとんがり帽子を被った老人。いかにも魔術師っぽい風体をしているが、事実、彼は魔術師だった。ヴァンダルは魔術の神である。

彼は魔術の真理を究めるため、このテーブル・マウンテンに引き籠もり、本の山に埋れながら研究を重ねていた。

彼いわく、前にひげを剃ったのは数年前、というほど魔術に没頭する研究者タイプだが、彼も僕の教育方針に一言あるらしい。

「この子は利発で聡明だ。是非、わしの後継者としてほしい。最強の賢者として教育したい」
その声は枯れていたが、力強く、決意に満ちている。
つまり神々の教育方針が分かれた、ということである。

剣術を極めさせたい剣神ローニン。

治療師にしたい女神ミリア。

魔術の道を追究させたい魔術の神ヴァンダル。

三人が三人、一歩も引かない。

神々の間に火花が飛び散る。

一触即発、まるで火薬庫のようになるが、仲裁するものが現れる。

万能の神レウスである。

彼はこのテーブル・マウンテンの神々をとりまとめる主神なのだ。

無限の貌を持つ神であるが、牡鹿の形をしている彼は、威厳ある表情と声でこう言った。

「子供の前で争うな！ それ以上、喧嘩をするならば、ウイルを連れて、別の世界に旅立つぞ」

主神に怒られたから、というよりも愛する子供を奪われることに恐怖した三人は、それぞれの主張を止める。

——一瞬だけであるが、ローニンがいったん、引き下がる素振りを見せたあと、さり気なく木刀を僕の側に置き、喧嘩が再発する。

ミリアは僕の近くに薬草を置き、ヴァンダルは魔術書を置く。老獪なヴァンダルは魔術書の上に鉛を置くものだから、ふたりは激怒する。

また、殴り合いの喧嘩になりそうだったので、万能の神レウスは言った。

「ええい、お前ら、いい加減にしろ。なぜ、そんなにも自分の意見を通そうとするのだ」
ローニンは答える。

「それはこの子が可愛いからだよ、レウス。可愛い我が子には自分の跡を継がせたいものさ。剣術は最高だ。きつと、将来、この子を守ってくれるはず」

ミリアも答える。

「前半までは完璧に同意。でも、この子を守るのは優しい心よ。相手を癒やす力こそがこの子の糧となるはず」

ヴァンダルもうなずく。

「その通り。しかし、この子を救うのは知識だ。万物の知識こそこの子を幸せにするはず」



それぞれが僕を愛してくれているのは分かるが、このままだと埒があかない。そう思ったレウスは宣言する。

「分かった。そこまで言うのならばそうするがよい。ただし、喧嘩は禁止だ。もしも喧嘩をしたならばウイルは取り上げるぞ」

レウスは一拍置くくと、
「ウイルの教育は日替わりで行う。それぞれ順番にな」と宣言した。

「それはどういう意味？」
女神ミアは尋ねる。

「そのままの意味だ。我が子ウイルにはそれぞれが教育を施す。つまり、ローニンが剣術を、ミアが治癒を、ヴァンダルが魔術を教え込むのだ」

その言葉を聞いた神々は、
「その手があったか！」
という顔をした。

その表情を見たレウスは、
「これで決まりだな。この子は最強の神々によって、最高の教育を受ける。やがて大人に

なるだろうが、そのとき、どのような大人になっているかな」

と、漏らした。

剣神を超える剣術を持ち、治癒の女神を超える癒やし力を持ち、魔術の神を超える魔力を持つているかもしれない。

あるいは、剣術はローニンにおよばず、治癒はミアに劣り、魔力はヴァンダルに負ける中途半端な大人になっているかもしれない。

しかし、そのようなことはどうでもいいことだった。

肝心なのは、ウイルという子供がどのような人間になるかである。

レウスとしては身体の強さよりも心の強さを持つてほしかった。

どのような強敵にも屈しない強い心、悪を許さない正義の心、弱きものに情けを掛ける慈悲の心。

それらさえ備えてくれれば、たとえ最弱の男になっても構うことはなかった。

そのようにウイルを育てる決意をしたが、レウスの杞憂は数年で吹き飛ぶ。

赤子から幼児へと成長する過程で、ウイルはとんでもない強さの片鱗を見せる。

ある日、剣神ローニンがウイルに訓練を施していた。

朝から晩まで剣術の手ほどきをしていたのだが、ローニンは何談めかして言った。

「ウィルよ、目の前にある巨木を切り裂けば、お前が前に欲しがっていたダガーをやるぞ」
「本当？」

ウィルは喜ぶと、さっそく巨木を切り裂く。

ローニンのように剣の先から剣閃を出そうとするが、そうそう簡単に出るものではない。
——出るものではなかったのだが、ウィルは三回、ローニンの真似をしながら木刀を振るうと、木刀の先から剣閃を出す。

木刀から放たれた黄金色の剣閃は巨木に当たる。
砕け散る巨木。

それを見ていたローニンは、「——よくやった。約束通り、ダガーはやるよ」とウィルにそれを渡す。

ウィルは喜びながら、山の仲間たち——、動物たちにダガーを見せびらかしに行く。
そこに現れたのは治癒の女神。彼女はローニンの横に並び立つと、ウィルをべた褒める。

「すごい才能ね。治癒師としてだけではなく、剣士としても一流だね」
もちろん、あの子は治癒師にするのだけど、と続けるが、ローニンはそんなこと聞いて

いなかった。正確には耳に入らない。

ウィルのすさまじい才能に驚いているのだ。

ローニンは木があつた場所まで歩むと独り言のように言った。

「……俺は木を切れと言ったんだぜ？ それなのにウィルのやつは木を砕きやがった」
砕けた木片となった欠片を握ると、にやりと微笑むローニン。

ミアアは治癒師に、ヴァンダルは魔術師にしたいようだが、ローニンはウィルを最強の剣士にしたかった。

ウィルのとんでもない才能を見て、決意を新たにするのだった。

十

剣術の才能があると分かった僕だが、ヒーラーとしての才能も豊かだった。

五歳の春、僕は山を駆け巡る。

狼や熊の友達と共に、外敵である魔物と戦う。

先頭に立ち、仲間を守るために戦闘を繰り返す。

僕はこのテーブル・マウンテンに侵入した魔物、グリーン・オーガと対峙する。

グリーン・オーガは全身緑色の魔物で、山に侵入しては、森の動物を食い荒らす化け物だった。

いや、食べるだけでは飽き足らず、か弱き動物を虐殺する。必要以上に動物を殺し、嗜虐心を満たすのだ。

そのような化け物を許すわけにはいかない。

僕はローニンからもらったミスリル製のダガーを構えると、グリーン・オーガを駆逐する。

まずはすばしっこい狼のシュルツがオーガを牽制、隙を作ると、僕が懐に飛び込み、横なぎの一撃を加える。

一撃で相手の錆びた剣を吹き飛ばすが、それだけでは終わらない。オーガには化け物じみた膂力があるのだ。

丸太のような腕を振り回すが、それは熊のハチによって受け止められる。

熊のハチは山一番の力持ちなのだ。

僕はハチが相手を抑えてくれている間に、後ろに回り込む。

そしてミスリル製の短剣を相手の首に突き立てる。

遠慮はしない。このオーガからは血の臭いがぶんぶんしたからだ。多くの生物を殺して

きた証拠だった。

うめき声を上げながら倒れるオーガ。

こうして僕は戦闘に勝利するが、見れば最初に牽制をし、オーガの視線を釘付けにしてくれたシュルツの背中から血が流れていた。

オーガの一撃をもらってしまったようだ。

僕は傷付いた狼の背中に手を当て治療魔法を掛ける。

狼のシュルツの身体が緑色に輝き、傷が塞がっていく。

「すごい！」

と動物たちは賞賛をする。

「これはミリア母さんから習ったんだ。ミリア母さんは僕を治療師にしたいみたい」
動物たちはそれがいい、治療師になって、自分たちを守ってほしいと口々に言う。

「うん、それはいいね。でも、ローニン父さんは僕を剣士にしたいみたいなんだ」

「治療師兼剣士になればいいじゃないか」

「そうだね。そういうのを聖騎士と言うらしい」

「ならば将来は聖騎士だな」

狼のシュルツは微笑むが、僕は苦笑いをする。

「ヴァンダル父さんは僕を魔術師にしたいみたいだね。毎日、分厚い教科書や歴史書を読まされる」

「勉強は嫌いなのか？」

「まさか、剣を振るうのと同じくらい好きだよ」

「ならば悩ましいな。剣と魔法と治癒、みつつを極めるしかないか」

「そうだね」

「ちなみにそのみつつを極めたものをなんと呼ぶのだ？」

僕は困った顔を見ると、分らない、というポーズをする。

「剣と魔法、だけならば魔法剣士という呼称があるけど、剣と魔法と治癒、みつつを極めたものの呼称はないんだ」

「ふむ、ならば新たに作るしかないな」

「自分で作るのか、その発想はなかった」

「そうだ、『勇者』という呼称はどうだ？ 格好いいではないか」

「勇者か。……うん、格好いいな。でも、勇者つてのは生まれつき決まってるってヴァンダル父さんが言っていた。生まれついたときに身体どこかに痣があるんだって」

自分の身体を見回すが、どこにも痣はない。

しかし、シユルツは気にすることなく言う。

「勇者とは職業ではなく、尊称だ。俺の父が言っていた。自分よりもか弱きものの前に立ち、身を挺して弱者を守るその心意気が勇者なのだ。つまり、ウィル、お前はもう勇者だ。我らテーブル・マウンテンの勇者だ」

「そうか……、そうなのか。うん、じゃあ、僕はテーブル・マウンテンの勇者だ」
改めて勇者という言葉を噛みしめる。

そして肺の中に目一杯刻み込むと、

「僕はテーブル・マウンテンの勇者だー！」
と叫んだ。

その言葉は山の隅々まで響き渡った。

治癒の女神ミリアはその姿を目に焼き付けると、ほろりと涙をこぼす。

立派に成長したウィルに感慨を抱いたのだ。

先日まで赤子だったウィルがよくもここまで立派に成長したものである。

しかも立派な治癒の使い手になっていた。

ウィルは上級魔法である《即回復》の魔法まで習得している。

無論、それを教えたのはミリアであるが、この歳で使いこなせるようになるとは思って
いなかった。

ウィルの治癒師としての才能は、かつてミリアが治癒魔法を伝授した伝説の聖女と同等
かもしれない。

いや、彼女ですら、この歳で《即回復》は使えなかったであろう。

それくらいウィルの才能はすば抜けていた。

将来が楽しみであるが、ミリアにはひとつだけ心配があった。

ミリアの瞳に可愛いウィルが映る。

「てゆうか、ウィル可愛すぎ。このままだと世界中のお姫様から求婚されちゃうかも」

ウィルの容姿は少女のように可愛らしかった。

それだけでなく、誰よりも強く、優しい少年は、ミリアの自慢の種であった。

ミリアは印画紙にウィルの姿を転写させると、神々の寄り合いで自慢することを誓った。
近く、治癒系神々の集会があるのである。

そこで思う存分、親馬鹿になるつもりであった。

十

ウィル七歳の冬。

僕はすくすくと育ち、神々の教えを吸収していく。

水竜の日はローニンの剣術道場、火竜の日はミリアの治癒教室、木竜の日はヴァンダル
の魔術講座。

というわけで今日はヴァンダル父さんに魔法を習う。

ヴァンダルは神々の中でも理論派として知られるので、ローニンのようにいきなり木刀
を渡したりしない。ミリアのように適当に薬草を煎じさせたりしない。

まずは座学ということで歴史書などをみっちり読まされる。

「なんで魔術の本じゃなくて、歴史の本なの？」

ある日、まったく魔法とは関係ない本を読まされることに疑問を感じた僕は尋ねる。

「魔法の基本は知識にある。膨大な魔術の体系を理解するには、基礎的な知識が必要じゃ」

それに、とヴァンダルは続ける。

「お前には頭がよくなつてほしい。より多くの物事を学び、大局的のものを見られる魔術
師になつてほしい。だから基礎教養から教える」

とヴァンダルはまず僕に読み書きを教え、その後、この世界の成り立ち、この国の歴史

などを教えてくれた。

「このミッドニア王国は世界の中心にある歴史ある大国。世界の中心ゆえ、常に戦乱に巻き込まれてきたが、このテーブル・マウンテンだけは各国の不可侵領域となっている。なぜか、分かるか？」

「ヴァンダル父さんたちがいるから？」

「その通り。このテーブル・マウンテンには神々が住んでいる。下界に干渉しない代わりに、下界の国々も干渉しない不文律を持っている」

「ふぶんりつ？」

「子供には難しい言葉じゃったな。簡単に言うたそうという決まり事がある」

「決まり事は知っている。ローニン父さんの決まり事は毎日お酒を飲むこと。ミアア母さんの決まり事は毎日、美肌パックをすること」

「わしの決まり事は毎日、本を読むことじゃな」

「うん、僕もヴァンダル父さんを見習って毎日、一冊は読むようにしている」

「すごいではないか」

とヴァンダルは僕に絵本を渡そうとするが、僕は洗顔をやる。

「毎日、一冊、絵本を読んでいるのだろうか？ ならば足りなくなるはずだ。今度、街に行

ったとき新しいものを買ってくる。今はこれで我慢してくれ」

「違ふよ。僕が毎日読んでいるのは、ヴァンダル父さんと一緒の本だよ」

「なに？ わしと一緒？」

僕はヴァンダルの書齋に置かれた分厚い本を指さす。

「昨日はこれを読んだ」

僕が指さしたのは、古代の魔術師カル・ラハブが書いた『炎竜の書』という魔術書だった。

「まさか、これは古代魔法言語で書かれたものだよ」

「古代魔法言語はヴァンダル父さんがよくしゃべっているじゃない」

「あれは独り言だ。まさか、その独り言を解説したのか？」

「うん！」

と元氣よくうなづく。

「信じられない。真実か？」

「本当だよ。じゃあ、当ててみせるよ。適当なページを言ってみて」

「ならば二二一ページ」

「二二一か、そこに書かれているのは、カル・ラハブさんが書いた炎魔法の一節。カル・

「ニンヤミリアのようににはしゃぐことはなかった。いや、それどころか赤子は五月蠅いと厭な顔をしたことを覚えていた。

だが、どうだ。実際、ウィルという人間の子供に触れて、自分の考えは変わった。この世界には自分よりも才能と可能性のある人間の子供がいると知り、老木の血がたぎった。

「この子ならば魔術の真理に到達できるかもしれない」
ぼつりとつぶやく。

あまたの魔術師が、最高の知能と呼ばれた賢者級の魔術師たちが挑み、結局到達するところができなかった魔術の真理に、この子ならば到達できるかもしれない。

そう思ったヴァンダルは頬を緩める。
真理に到達するのが自分ではないというのが癢であるが、思ったよりも嫉妬心は湧かない。

ウィルの屈託のない笑顔を見ているとそんなものは消し飛んでしまふ。
自分の息子が自分を超えるかと思うと嬉しさが湧かない。

「かつて魔術の真理に挑戦した無数の賢者たちよ。今、ここに宣言しよう。我が息子こそ、全魔術師の悲願を達成するものなり」

十

魔術の神ヴァンダルは心の中でそう叫ぶと、愛しい息子を抱きしめた。

最高の父さんと母さんたちに愛情を持って育てられる。

最強の父さんと母さんたちに厳しく修行を施される。

すると僕はすすくと立派に育つ。

病気になることなく、一二歳まで育つ。

この世界では一五歳が成人であるが、一二歳には大抵の子供は家業を継ぐか、それ以外の道へ進むかの進路を決めている。

農地を継ぐ子供は鋤や鋤の修復方法を覚える。種をまく季節を覚える。

領地を継ぐ子供は武術の訓練を始め、立派な騎士になることを誓う。

商人の子供は読み書き算術を学ぶのだ。

一方、僕はというと進路を迷っていた。

なぜならば父親と母親の意見がバラバラだからである。

剣神ローニンは当然のように剣を僕に託す。

「男がちまちまと回復や魔術など馬鹿らしい。男は剣を握るべきなんだ」

治癒の女神ミリアはそんなの野蛮よ、とポーシオンを渡す。

「ウィルは優しい子。治癒の道を極め、山の聖者になるべきよ」

魔術の神ヴァンダルは言う。どちらともくくらない、と。

「魔術の真理こそ人間が学ぶべきこと。魔術の深淵を探究してこそ人生の尊さも味わえる」

それぞれに違う主張をする。皆、こめかみをひくつかせる。ローニンは腰の刀に手を伸ばし、ミリアは身体に魔力をまとわせ、ヴァンダルは杖に手を伸ばす。

三者三様どころか、敵対する始末。

僕としては三人の父母、皆好きだったので、ひとりだけを選ぶことはできない。

ローニンもミリアもヴァンダルもそれぞれに好きであった。

しかもただ好きだけでなく、それぞれの得意とする分野も好きなのである。

剣を振るうのも好きだし、ポーシオンを調合するのも好きだし、魔術の本を読むのも好きだった。

それらを極めたい。色々な基礎を学んだが、それぞれさらに極めたいと思っていた。

そのことを三人のいない場所、木の上で告白すると、褒めてくれる人物が現れる。

鳥の姿をした人物だった。

彼の名前は万能の神レウス、赤子だった僕を拾ってくれた恩人だ。

彼は無貌の神、千の化身を持つ神の異名がある。あらゆる姿に変身できるのだ。

ヒヨドリ姿をした四人目の父親は、謹厳実直な声で僕を褒める。

「ウィルよ、お前は素晴らしいな。我が儘な三人の父母の期待に応えている」

苦笑を漏らしながら答える。

「そんなことはないよ。父さんたちの修行はどれも本当に面白いんだ」

「しかし、いつかはどれかを選ばなければなるまい」

「やっぱりそうかな？」

「そうだ。お前には才能があるが、さすがにすべてを極めるのは難しいだろう。剣術では

ローニンに及ばない、治癒ではミリアに劣る、魔術ではヴァンダルに勝てない。それでは

竜頭蛇尾もいところだ」

「竜の頭になれるだけ立派だと思う。それにレウス父さんはそれでもいいって言っていたよな」

「気が変わった。お前の才能は最強だ。だから最強の男になってほしい」

「最強になったらなにかいいことある？」

「あるさ。仲間を守る。家族を守る。厭なやつに頭を下げなくていい」

「最初のふたつは魅力的だ」

「仲間や家族を守る強い男になりたいか？」

「うん、山の動物たちを守りたい。父さんや母さんたちを助けたい。……でも」

「でも？」

「たしかに」

「かっかっか、と大仰おおきまように笑うレウス。つられて僕の口角も緩む。

「ただ、お前にはより大きな視点を持つてほしいな」

「大きな視点？」

「ああ、家族や仲間を守るのも大切だ。それすら守り切れないものも多いからな。しかし、お前にはより多くのものを救える力があると思うんだ」

「より多くのもの？」

「そうだ。眼前に広がる光景を見てみる」

「……眼前？」

「僕は見慣れた景色を見つめる。

山々が広がっている。木々が目に飛び込む。その先にあるのは石で作られた人工物だった。

「あれは街だね？ 人間が住んでいるんでしょう？」

「そうだ。あそこには人間が住んでいる。お前の仲間だな」

「でも、一度も会ったことがないよ？」

「そうだ。我々は山を下りるのを禁じていた」

「うん、危険が一杯いっぱいなんだよね」

「そうだ。子供であるお前には危険が一杯だ。誘惑ゆうわくも多い。敵もたくさんいる。だが、我はいつかお前にあそこに旅立ってほしいと思っっている」

「あそこに？」

「そうだ。あそこにはたくさんさんの人間が住んでいる。お前にとって良い人間も悪い人間も。しかし、彼らと出会えばお前も成長するだろう。あらたな可能性を開いてくれるはずだ」

「新たな可能性……」

「僕は改めて街を見下ろす。たしかに一度あそこに行ってみたいとは思っていた。

「それにお前はいつか旅立つ。それは宿命なのだ」

「宿命——」

「定められた運命だな。我が赤子だったお前を拾ったとき、天啓てんけいが湧いたのだ」

「天啓？ 神様なの？」

神様に似つかわしくない言葉に僕は苦笑してしまふ。

「我は神と呼ばれているが絶対者ではない。この世界には神を作った圧倒的な超越者もいることだろう。いや、調整者かな」

レウスは感慨深げに言うが、その話題を広げる気はないようだ。

「ともかく、お前を拾ったとき、内に声が湧いた。なにものかがささやいた。この子はやがて世界を救う子になる。我らが世界の救世主になると」

「救世主……」

つぶやいてみるが、当然、実感が湧かない。

しかし、レウスは「気にするな」と言う。今は実感がなくても定めるときは訪れると言う。

レウスは預言者のように言う。

「やがてお前を大海に放つ使者がやってこよう。それは我々親子が、別れを告げる日でもある。しかし、それは悲しいことではない。旅立ちは新たな出逢いの始まりでもあるのだ。それに我ら親子が培った絆は距離という暴虐でも時間という悪魔でも引き裂けない。どのように離れようとも、どんなに時が経っても、我らは最高の親子ぞ」

ヒヨドリのレウスがそう言うと、僕も「うん」と、うなずいた。

そしてふたりは一緒に家に帰る。

今日はミリア母さんが腕によりを掛けて料理を作ってくれているのだ。

ちなみにミリア母さんは女神だけど、五人の中で一番料理が下手だった。しかしそれでも一番一生懸命に作ってくれるので、母さんの料理が一番好きだった。

第二章 一四歳になった少年

十

一四歳になった僕。

正確には一四歳と一ヶ月と数日。

つまりほとんど成人となっていた。

もはや体軀は立派な大人——とは言い切れない。

激しい修行を重ねたが、僕の身体はローニンのように大きくはならなかった。

かといってヴァンダルのように貧弱でもない。

強いていえばミリア母さんから胸とくびれを取ったような感じ。どちらかといえば華奢だった。

顔もどこか女の子っぽい。女装をさせればさぞ美人になるだろう、とはローニンの言葉であり、ミリアが実行しようとしたところであるが、僕は必死に抵抗した。

だから今まで女装はさせられずに済んだが、一五歳の誕生日、つまり、成人の日までに

一度はさせたいとミリアは狙っていた。

女装などさせられたらたまらない。山の仲間たちに笑われる。

そう思った僕は成人の日の準備をする父母たちに背中を向け、狼のシユルツの背中に乗った。

気晴らしに山を散策するのだ。

友の背に乗った僕は風と一体になる。

「風が心地いい……」

素直な感想を漏らすと、友が尋ねてくる。

「我が友ウィルよ。お前が山を下りるとは本当か？」

「どこでその話を？」

「山の仲間たちがささやいている」

「カーバンクルのリックだな。さては」

「あいつはおしゃべりだからな」

「たしかに」

僕が間接的に犯人の名を告げると、シユルツは真面目な表情で問い直してきた。

「して真実なのか？」

「……………うん」

やや間を置いて答えたのは、親友に嘘をつきたくなかったからだ。

「レウス父さんが言ったんだ。僕はやがてこの山を下りるって。やがて救世主というやつになるらしい」

「救世主か。たしかにお前のような男がこの世界に必要なのかもしれぬ」

「ごめんね。そうなるともう君たちを守れない」

「なにを小癪な。山を守っているのはウィルだけではない。この山には他にも猛者がいる」

「シユルツとか？」

「そうだ。俺は狼最強だ」

「そうだね。あとは熊のハチも強い。僕がいなくても山は守れると思う」

「いざとなったら神々にご協力願うさ」

「そうだね。神々は人の諍いに参加しちや駄目らしいけど、動物はありかもしれないし」

「まるでとんちだが、実際、何度も守ってもらった」

「そうだね。僕がいなくなってもやっていける。……ちよつと寂しいけど」

「なあに永遠の別れじゃないさ。我々の絆は不変だ」

レウスのようなことを言うシユルツを抱きしめた。

狼特有のゴワゴワした毛並みであったが、その下から漏れ出る温かさは心地よかった。

「……………シユルツ、さようなら」

「……………今生の別れのようなことを言うでない」

「たしかに。またいつか会えるよね」

「そうだ。世界を救ったあと、お前は再びこの山に戻ってくる。いや、救わなくても戻ってきていい。ここはお前の故郷なのだ。戦いに疲れたらいつでも戻ってきていいんだ」

「必ず戻るよ。世界の端から端を見たあとに。ここより良い場所なんて存在しないからね。戻ってきたときはシユルツもお嫁さんをもらっているはずだから、子供を僕に見せて」

「生意気なことを言うな。だが、まあ、それも悪くない。お前のお守りから解放されたら嫁を取る暇くらいできるだろう」

「ヴァイスと結婚するんだね」

ヴァイスとは山にいる白い毛並みの狼である。シユルツとは幼なじみであるが、互いに意地っ張りでなかなか恋に発展しない。

「あのようなお転婆を嫁にするくらいならば熊でも嫁にするわ」

シユルツは気恥ずかしげに顔を背けると、身体を寄せてきた。

最後の別れ、僕の匂いを染みこませるかのように身体をこすりつけると、別れを惜しん

だが、その動作が途中で止まる。

シュルツは神妙な表情をすると、麓のほうを見つめる。

「——なにものかが近づいてくる」

僕も同じような表情になる。

僕はシュルツの鼻の良さに全面的な信頼を置いていた。

「なにものって?」

「分らない。おそらくは女だ」

「女?」

「ああ、人間のな」

「人間の女——」

言葉を詰まらせたのは、生まれてから一度も人間の女を見たことがないからだ。

山の動物の雌は見たことがある。女神も当然ある。しかし、人間の女は見たことがなかった。

このテーブル・マウンテンは神々が住まいし山、聖域であるから人間が近寄ってはならないことになっている。

人間の男は稀に迷い込んできたり、あるいは意図的に侵入してくるが、人間の女がやっ

てきたことはない。

それくらいこの山に至る道が険しいということでもあるが。

「……人間の女か。父さんたちに知らせたほうがいいかな?」

「それがいい」

と言うシュルツだが、僕は麓へ向かう。

「どうした? 知らせに行くのではないのか?」

「そう思ったけど、それは山鳥に任せる。僕はその女性を助けに行くよ」

「助ける?」

シュルツが不思議な顔をしたので説明する。

「今、魔法で聴覚を強化したら、金属音が聞こえた。鎧を着た男が複数、こちらに向かっている。彼女を追っているようだ」

「なるほど、しかし、男たちのほうが善かもしれないぞ」

「ミリア母さんは言っていた。女を寄つてたかつて虐めるのは悪だって」

「なるほど、その原則を信じるか」

「うん、それにだけ、彼女が放つ心音、とても心地よいんだ。こんな心音を響き出せる女性が悪党のわけがない」

「この距離で彼女の心音を聞き分けたと言うのか？」

シュルツは驚きの表情を見せる。

通常、《聴覚強化》の魔法を使っても、この距離から人間の心臓の音を聞き分けることなどできない。

魔術の天才にしかできない行為であるが、ウイルはやはり天才なのだろうか。

改めて長年連れ添った相棒であるウイルを見つめると、シュルツは背中に彼を乗せ、走り出した。

風と一体になるかのように木々の間を駆け抜けると、そのまま山を駆け下り、女性のもとへ向かう。

シュルツたちが駆けつけると、白い法衣を着た女性と鎧を着た男たちが戦闘を繰り広げていた。

十

麓に至る道にいたのは美しい女性だった。

年齢は僕より少し上であろうか、清楚で穏やかなまるで絵物語に出てくる聖女のようにであった。

「治療神ミリア様よりも神々しいな」

と言うシュルツの言葉に思わず苦笑してしまうが、その意見は正しかった。

僕たちの存在に気が付いた彼女は、修道女のように毅然と尋ねてくる。

「そこにおられる方はもしやこの山に住まいし方ですか」

「そうです」

と答えると彼女は微笑む。

「神とその眷属が住まう聖なる山に土足で足を踏み入れて申し訳ありません。それにこのような輩を引き入れてしまって」

「そのことは気にしないで。どこからどう見ても男たちのほうが悪党に見えるよ」

「このものたちはおそらく邪教の集団の一味でしょう。私と勇者様の接触を拒んでいるのです」

「勇者？」

「この山に住まいし神々に育てられた少年のことです」

「というと僕なのかな？」

「失礼ですが、あなたは黒髪ですか？」

「そうだけど」

「ならばきつとあなたがそうでしょう」

黒髪であることも確認できないのはどうしてだろう、と疑問に思ったが、すぐに理由が判明した。

法衣を着た銀髪の女性は、盲目であった。

彼女の目の周りにはマスクがはめられていた。

僕が気が付いたことに気が付いたのだろう。彼女は説明する。

「私は地母神に身を捧げた盲目の巫女ルナマリア」

「地母神」

聞いたことがある。この大地に豊穰をもたらすいにしえの神の名前だ。とても戒律が厳しい神様として知られ、地母神に身を捧げる巫女は皆、自ら光を奪うのだ。幼き頃に自分の目を潰すのだ。さすれば聖なる巫女になれるというのが、地母神教を布教する司祭の言葉であった。

ただ、それは俗説というか伝説の類いで、現代でもそのような真似をしている巫女がいるとは聞いたことがなかった。そのことをルナマリアに伝えると、自嘲気味に笑う。

彼女は「盲目の仮面」を取ると、以後、素顔を晒しながら話してくれる。

「たしかに古い因習です。ですがその伝統は今も受け継がれています。私他にも盲目の巫女はたくさんいます」

「その盲目の巫女がなぜ、このテーブル・マウンテンに？」

「それは……」

と言いよどんだのはなにか裏があるからか、それとも敵の攻撃が激しくなってきたからか、は分からなかった。双方のような気がしたが、ともかく、ルナマリアの応援をしたほうがいいような気がした。

僕とシュルツは敵兵の間に立ち塞がると、戦闘の意志を示した。

「灰色、狼に人間のガキ。珍妙な取り合わせだ」

「手向かうならば斬るだけだが」

「子供を斬るのか？ 始末するのは巫女だけと聞いていたが」

鎧を着た男たちは相談を始めるが、結局、多数決で僕を斬ることにしたようだ。依頼主はルナマリアの死を望んでいるそうだが、ルナマリアが探そうとしている勇者にも興味があ

あるようだ。もしもついでに勇者を殺せば重畳らしい。

まったく、人の命をなんとも思っていない連中だ。ため息を漏らしながら言葉を探す。

「シユルツ、こういう輩をなんて言うんだっけ？」

「悪党、だな」

狼のシユルツは一言で斬り伏せる。

「そうだった。悪党だ。こういうやつに遠慮はいらないだよね？」

「ああ、喉笛を切り裂いてやれ」

シユルツはさつそく、彼らの喉笛を狙うが、僕も同様に攻撃する。無論、刃物は使わな
いが、僕が使うのは体術である。見ればこいつらはそんなに強くない。とても鈍重なのだ。
一挙手一投足がとても鈍い。刃物など使わなくても容易に対処できそうだった。

僕はローニンに習った古武術を使う。相手の懐に入り込み、相手の呼吸に合わせて突き
を繰り出す。子供の拳であつたが、相手が前のめりになる瞬間、急所にぶち込めば大ダメ
ージを与えられる。

相手の喉笛、みぞおち、目、こめかみ、どんな達人も鍛えられない場所に的確に打撃を
与えていくと、悪党どもはその場で悶え苦しむ。

それを聞いていたルナマリアは賛嘆の声を上げる。

「勇者様の武術は神がかっています」

「神様に教えてもらったやつだからね」

「やはりあなたが伝説の子供、勇者様なのです」

「それは違うと思う。神様である父さんたちに育てられたけど、勇者の印はない」

「……印がないのですか」

ルナマリアは軽く表情を曇らせる。

「善と悪に調和をもたらすもの。この世界の救世主。彼は神々に育てられた真の存在」

「それは？」

「我が教団に伝わる古い言葉です」

「神々に育てられたというところしか共通点がないね」

「ですね。しかし、それで十分です」

ルナマリアはそう言うと、右手を光らせた。それをそうつと悪党の胸に添える。悪党は

一〇メートル吹き飛び、木々を折る。

「君もすごい力だね」

「この力は神の恩寵にしか過ぎません」

「すごい恩寵だ」

と言うが、僕はすでに五人の悪党を戦闘不能にしていた。このままならば簡単に殲滅できさるだろう、と思っていたが、そうはいかなかった。

奥から悪党どもの増援が現れたからである。その数一〇。皆、重武装をしていた。

「……厄介だな。魔法の武器を持っているものもいる」

光を放つショートソードを見る。皆、熟練の傭兵といった感じだった。

「あいつらは邪教徒が雇った傭兵でしょう。手強いはずですよ」

「みたいだね。倒せないことはないと思うけど。……ルナマリア、僕の後ろに下がってくれる？」

「お気持ち嬉しいですが、私は神と勇者様にその身を捧げた巫女でございます。命など惜しくありません」

「君が惜しくなくても僕が惜しいんだよ。今からこの辺りが真つ赤に染まる。僕の後ろにいれば《防壁》の魔法で防いであげられる」

「真つ赤？ 炎の魔法を使うのですか？」

「不正解だよ。炎を使うのは僕じゃない。天から飛んでくるトカゲだ」

「トカゲ？」

ルナマリアが首をかしげると、空が真つ暗になる。

先ほどまで明るかった周囲が暗闇に包まれる。雲が出たわけではない。空を覆ったのは翼を持ったトカゲ。つまりドラゴンだった。

真つ赤な肌を持ったドラゴンは、口から炎を漏らしながら翼をはためかせている。まるで嵐が迫っているかのような風が周囲を包む。

ルナマリアもその風、それに竜の咆哮で恐怖の存在を察知したようだ。

「あれはドラゴンですね！」

「そうだよ。テーブル・マウンテンにはいないけど、その周囲には一杯いるんだ。あの傭兵たちが引き連れてきてしまったようだね」

見れば傭兵の衣服はそんなにくたびれていない。街から最短距離でここまでやってきたのだろう。ドラゴンの巣があるとも知らず、谷を通ってきてしまったのかもしれない。

彼らはその近道の代償を支払わなければならない。

レッドドラゴンはホバリングを止めると、急降下し、傭兵のひとりを鷲掴みにする。

そのまま大空を舞うと、高所から傭兵を解き放つ。大声を上げる傭兵であったが、ドラゴンは急降降するとそのまま傭兵を飲み込んだ。悲鳴ごと喰らい尽くす。

怒りに燃えた仲間傭兵は、クロスボウや弓で反撃を試みるが、巨大なドラゴンの鱗を貫くことはできなかった。それどころか頭上で炎の息を吐かれ、火だるまとなっている。

このまま見ていけば傭兵たちはもちろん、邪教徒も全滅であろうが、僕は傍観者にはなれなかった。

理由はふたつ、ひとつはもしもドラゴンがやつらを倒しても次は僕らにその牙をむいてくるに決まっていたからである。

ルナマリアという巫女とは出会ったばかりであるが、彼女には不思議と親近感を感じていた。守りたいという保護欲も。僕にとつて彼女はすでに山の仲間たちと変わらない。

もうひとつの理由は、悪党とはいえ、見殺しにするのは気が引けたのだ。

こいつらはルナマリアを殺そうとしているらしいが、それでも彼女を殺したわけではない。もしかしたら誰かに命令されているだけかもしれない。

それにこいつらにだって、父親や母親はいるだろう。現世にいるかは分からないが、死ねば双方が悲しむと思われた。

レウス父さん、ローニン父さん、ミア母さん、ヴァンダル父さん、それぞれの笑顔が浮かぶ。その表情を思い出すと、見殺しという選択肢は浮かばない。

なので僕は腰の短剣を抜き放つ。

ミスリル製の短剣だから、ドラゴンの鱗とて通すであろうが、どんなに深く差し込んでも内臓に届くようには見えない。それくらいレッドドラゴンは大きい。皮下脂肪がとんで

もない。

「普通にやったら傷を付けるくらいだけど、僕には必殺技がある」

必殺技とは、剣神であるローニンに習った技術。魔術の神ヴァンダルに習った魔法である。

ローニンの剣技はペーパーナイフとて凶器に変える総合剣術、ヴァンダルは小枝すら業物に変える付与魔術を極めていた。

つまり、ミスリルという魔法を通しやすい金属に魔法を付与すれば、その威力は計り知れなくなるということだ。

僕は邪教徒たちを蹂躪するドラゴンを睨み付ける。

慈悲のない竜の目と視線が交差するが、恐怖は覚えなかった。いや、逆に竜のほうが大膽ならぬ気配を察したようだ。

この少年を生かしておくと危ない!!

そう思った竜は食べかけの邪教徒を放り投げると、翼をはためかせ、こちらに向かってくる。

「……手間が省ける」

こちらとしては標的がこちらに移ってくれたほうが有り難い。

邪教徒から離れてくれたほうが大技を仕掛けやすいのだ。
そう思った僕は呪文の詠唱をする。

「無念の水結よ、虚空の風を凍てつかせよ！
静寂を支配し、すべてを氷結させよ！」

そう詠唱を終えると、ミスリルの短剣が氷に包まれる。冷気の魔力に包まれる。

あとはそれを剣閃にして解き放つだけだった。

僕は何度も練習してきた剣閃をドラゴンに放つ。

練習で何百回もしたことであつたが、実戦でもまっすぐに飛ぶ。

ローニンがその筋を褒め、ヴァンダルがその才を賞賛した魔法剣の一撃がドラゴンを襲う。

それを後方から確認していたルナマリアは驚愕する。無論、彼女の瞳に光はないが、その分、知覚は誰よりも優れていた。

少年の魔力の冷気は肌を刺すほどに冷たく、少年の魔力の波動はルナマリアの全身を包

み込むかのようにあつた。彼の冷気の魔法剣の威力はとてつもないものになる。ルナマリアは確信したが、その確信は間違つていなかった。

冷気の剣で切り裂かれたレッドドラゴン。やつは炎の息で対抗しようとしたが、少年の放った冷気は炎ごと氷漬けにし、ドラゴンの肉を裂いた。

氷像のように氷漬けにされながら肉を真つ二つに裂かれるドラゴン。氷の中には赤い皮膚と鮮血が飛び散った竜がおり、とても美しい。

まるで美術品のようであるが、なによりも恐ろしいのは、この巨大なドラゴンを倒したのが、まだ一四歳の少年ということであつた。

このような少年がいるとは聞いていない。

口々に悲鳴を漏らしながら逃げ出す邪教徒たち。

彼らが完全に撤退したのを確認すると、ルナマリアは改めて少年の前に立ち、右手を差し出す。握手をしたかったのだ。

それに名前も聞きたかつた。

そのことを少年に伝えると、少年は気恥ずかしげに微笑みながら言った。

「——僕の名前はウイル。ただのウイル。平民だけど、父さんと母さんは神様なんだ」

照れ笑いを浮かべる少年ウイル。

とてもドラゴンを倒した英雄には見えなかったが、ルナマリアは彼がこの世界を救う勇者であると確信していた。

十

ドラゴンの氷像の前で自己紹介をするふたり。僕は自分がウイルという名前であること、それに神々の息子であることを話す。それと相棒のシユルツも紹介する。

シユルツは最初、見慣れぬ女に警戒をしたが、彼女が膝を折り、微笑むと、黙って喉を撫でられる。ルナマリアもまるで目が見えているかのように的確にシユルツの弱いところを撫でる。

それを見ていてこの人は本当に盲目なのだろうか、という疑念が浮かぶが、ルナマリアはにこりと否定する。

「先ほどから私の行動は少し変でしょう。まるで光があるかのように見えませんか？」

「たしかに目が不自由とはとても思えない」

「子供の頃から目が見えないと、色々と細かい技を覚えるのです」

「技？」

こくりとわずくルナマリア。



「視力以外の感覚が鋭くなるのです。聴覚や嗅覚などが代表的ですが、触覚も。——そうですね。ウィル様、私が後方を向いたら、右手か左手を挙げてください」

うん、分かった、と素直に左手を挙げると、ルナマリアは後ろを向きながら言う。

「今、左手を挙げていますね。しかも、拳を握りしめたまま」

「な、どうして分かったの!？」

「簡単です。空気の動きです。手を広げたまま挙げると指の間に空気が通って独特の音がします」

「右か左か当てるだけでもすごいのに、そんなことも分かるなんて、すごい」

「すごいかは分かりませんが、幼き頃よりこうして生きているので、生活には不自由しません」

「大変だったね、という同情の言葉は失礼に当たるかもしれないね」

「そうですね。望んで目を神に捧げましたし、巫女になったことに後悔はありません」

「でも、その盲目の巫女がどうしてこんな場所に？」

「それは最初に言いましたが、私はこの世界を救う勇者を探しているのです。それはあなた様だと思っています」

「僕が？ でも、印が……」

「印など不要です。仮にあっても私には見えません」

彼女は微笑むと続ける。

「私は神の神託を受けました。必ずこの地にこの世界に平和をもたらす勇者がいる、と。そしてその方はあなた以外考えられません」

「たしかにこの地には人間は僕しかいないけど」

「ならばもはや確実ですね。ささ、勇者様、どうかこのルナマリアと共に世界を救う旅に出てください」

「いきなり言われても」

「そうですね。たしか、神々に育てられたのですよね」

「そっだよ」

「ならばその神々に挨拶に伺います。このルナマリアが従者としてウィル様を導くお許しを得ます」

「お許しかあ……」

父さんたちの顔を思い浮かべるが、皆が反対する顔が浮かぶ。また修行が足りない。可愛い僕を外に出したくない。この山で一暮らしせ。そのように説得される未来図が浮かぶ。

快く送り出してくれるのは万能の神レウス父さんくらいだろうな、と説明すると、ルナ

マリアは、

「……そうなのですか。残念です」

と肩かたを落とす。

が、それも数秒、すぐににこりと言う。

「逆に言えばひとり賛成してくださるのですよね。ならばその方を頼りましょう。それに最終的に山を下りるのはウイル様が決めること。ウイル様は外の世界を見たいのですね？」

「……うん、見てみたい」

シュルツにだけ語った決意を彼女にも披露ひろうする。

僕は山の外を見てみたかった。

無論、この山は大好きである。大好きな父さんも母さんもいる。修行や勉強も楽しい。

仲間と遊ぶのも大好きだ。

でも、勉強で習う外の世界。動物たちから外の世界の話を知ると、どうしても現実の世界を見たくなるのだ。

魔術の神ヴァンダルは、それは僕が人の子であるから、と言う。人間というやつは探究心を押し込めるのが難しいのだ。

好奇心こうきしんを殺すのは神にも不可能、というヴァンダルの言葉を思い出した僕は、結局、ルナマリアの言葉に従うことにした。

いつか好奇心と探究心を剥き出しにして旅立つ日がくる。ならばそれが今で悪い道理はない。彼女と一緒に外の世界を旅するのが一番いいように思われたのだ。

そのことをルナマリアに伝えると、彼女は花が咲き誇ったかのような笑みを浮かべた。同じ年頃の少女が笑うのを初めて見た。ミリア母さんとはまったく違った笑顔だった。しばしその笑顔に見とれると、僕は彼女の手を引き、山頂へ向かった。